

亀井昭陽「東遊賦」訳注（一）

著者	野田 雄史
雑誌名	長崎外大論叢
号	21
ページ	131-138
発行年	2017-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000586/



*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 21 2017*

亀井昭陽「東遊賦」 訳注 (一)

野 田 雄 史

亀井昭陽「東遊賦」 譯註 (一)

野 田 雄 史

長崎外大論叢

第21号
(別冊)

長崎外国語大学
2017年12月

【翻訳】

亀井昭陽「東遊賦」 訳注 (一)

野田雄史

亀井昭陽「東遊賦」 譯註 (一)

野田雄史

概要

亀井昭陽は福岡藩の儒者、亀井南冥の兒子。

南冥出身於姪濱村の醫家、後來跟父親龜井聽因一起一邊在福岡城旁邊的唐人町開醫院，一邊開私塾教弟子們。安永七年（1778）五月八日，南冥突然從布衣醫生被提拔到福岡藩儒醫當官了。天明三年（1783）五月十八日，南冥建議過的學問所的設置被得到了允許，叫成西學甘棠館，和同時開辦的東學修猷館成了一對。

寛政二年（1790）發布了寛政禁異學（幕府學校裏禁止教朱子學以外的學問），受了它的影響，古文辭學者南冥難以處世，寛政四年（1792）被黜免了。甘棠館雖然被兒子昭陽繼承下來，寛政十年（1798）却被大火燒掉了，因此被廢除，東學從而合併了西學。後來，昭陽被取消儒醫的身份，當平士身份了。

這東遊賦，在困難的時候，昭陽讓秋月藩主黑田長舒提拔到東遊隨員，途次看到各種景物而詠它的賦作品。

キーワード：日本の江戸時代の辞賦作品，楚辭離騷型句，日本漢文

【解題】

作賦の背景は作中で示されるが、作者の亀井昭陽が秋月藩の藩主黒田長舒の文化三年（1806）の參勤交代に同行して江戸に赴いた際の道中記である。東に遊学したので「東遊」と名付く。昭陽の父南冥が、この時の昭陽とほぼ同じ年齢の時に薩摩に遊学したことを「南游紀行」という散文に残しているが、その内容及び命名に影響を受けていると思われる。

亀井昭陽（1773～1836）は、町医者から福岡藩儒に抜擢された亀井南冥（1743～1814）の長男。ただ、この当時は、一旦父南冥から継いだ藩儒の地位を剥奪され、平士身分となっていた。

黒田長舒（1765～1807）は高鍋藩主秋月種茂の次男で、天明五年（1785）に秋月藩に養子として入った。秋月藩は福岡藩の支藩であるが、当時の福岡藩の藩主黒田斉隆（1777～1795）・黒田斉清（1795～1851）がともに幼少であったため補佐役として福岡藩に関与していたことと、長舒自身が南冥に師事していたことから、秋月藩主の參勤交代に福岡藩士を同行させたものである。なお、この時の昭陽の役目の一つに、父南冥の著書『論語語由』を江戸で出版することがあった。

本作は「賦」であるが、全篇に互って奇数句末に「兮」字を使い、「3－虚詞－2」のリズムを基本とする離騷型で作られている。全158句。今回はそのうち、1～58句を注解する。

底本には『亀井南冥・昭陽全集』所収の『昭陽先生文集二編』を使った。また、同全集には「東遊賦」単体の写本が収められており、詳細な注（注釈者不明）が付いている。適宜対校及び注への言及

で用いるが、「注本」と称する。

第一段 (001~020)

受秋侯之寵光兮	下平11唐	秋侯の寵光を受け
復我將遊東方	下平10陽	復(はる)かに我將に東方に遊ばんとす
嘉世網之俄解兮		世網の俄かに解けるを嘉し
樂懸弧之有祥	下平10陽	懸弧の祥有るを樂しむ
父抃舞以勵我兮		父は抃舞(べんぶ)して以て我を勵まし
母歡歆以治裝	下平10陽	母は歡歆(くわんく)して以て装を治む
惟丙寅陽月吉兮		惟れ丙寅の陽月吉
甲之鼃我以行	下平11唐	甲の鼃(あさ)我れ以て行く
僕揚揚以策馬兮		僕は揚揚として以て馬に策(むちう)ち
揖故山以出疆	下平10陽	故山に揖して以て疆を出づ
趨豐城而縱柂兮		豐城を趨(こ)えて柂(かぢ)を縱(と)り
硯海波風盪航	下平11唐	硯海の波風に航(ふね)を盪(こ)ぐ
踵穴門遂觀周兮		穴門を踵みて遂に周を觀
謁我師于徳城	下平14清	我が師に徳城に謁す
故舊雲集餞予兮		故舊雲集して予に餞し
夏古琴振正聲	下平14清	古琴を夏(う)ちて正聲を振ふ
行色壯氣成虹兮		行色壯氣虹を成し
篙小瀨踏藝陽	下平10陽	小瀨に篙(さを)して藝陽を踏む
蹕六八之盤規兮		六八の盤規を蹕(こ)ゆれば
巖島巋然于滄瀛	下平14清	巖島滄瀛に巋然たり

[語注]

秋侯 注本に「秋月侯甲斐守長舒」とある。秋月藩主黒田長舒については解題を参照のこと。

世網 世間のしがらみ。これが「急にとけた」というのは、秋月藩主に参勤交代への同行を命じられ、儒官免官以降の平士勤務からつかのま解放されることを言う。

懸弧 『礼記』内則篇の「子生、男子設弧於門左、女子設帨於門右。(子生るるに、男子なれば弧を門左に設け、女子なれば帨を門右に設く。)」から、男児誕生を言う。この前年、昭陽には長男の義一郎が生まれていた。

抃舞・歡歆 嵇康「琴賦」(文選卷18)に「其康樂者聞之 則歆愉懽釋 抃舞踊溢(其の康樂する者之を聞けば 則ち歆愉懽釋し 抃舞踊溢す)」とあるように、心から楽しむ様を表わす対表現。

丙寅 文化三年(1806)。

陽月吉 十月一日。十月は極陰にして、陰極まれば陽を生ず。月吉は毎月朔日。

甲之鼃我以行 「楚辭 九章 哀郢」に「出國門而軫懷兮 甲之鼃吾以行(國門を出でて懷を軫め甲の鼃吾れ以て行く)」とあるのをそのまま引く。哀郢篇では悲痛の出発であるが、ここではその背景までは用いない。

豊城 豊前国都小倉を指す。

硯海波風盪航 離騒型は通常「3-虚詞-2」のリズムを持つ。ここは「2-2-2」となり、虚詞を持たず破調である。この破調は、直前まで陸路であったのに、ここで海路を取ることを際立たせるものであり、「波風」や「盪」の語彙もその効果を高める。なお、この「2-2-2」の破調は後に宇治川を渡る時にも利用されている。昭陽自身がそこまで計算して配置したのかは不明だが、船旅そのものが珍しかったらう彼の興奮が伝わってくる。

硯海 豊前と長門を隔てる関門海峡を指す。長門の下関で硯を産することより名付く。

穴門 関門海峡の古称。注本に「古名穴門後訛長門」とある。

観周 注本に「周防」とあるので、直接的には「周防国を見て回る」こと。だが、同じく注本も指摘するように、この語は『孔子家語』の篇名でもある。『孔子家語』観周篇は孔子が周を訪問して老子に教えを請う内容であり、当然その故事を踏まえて、「孔子が周を訪問して老子に教えを請うたように、私も周防国を訪問して私の師匠（島田藍泉 後述）に教えを請うた」という意味になる。「観周」を修飾する「遂」は、以前からの念願をようやく果たすことができた、という気分を伝える。

我師 島田藍泉（1751～1809）を指す。役小角の流れをくむことから役藍泉とも呼ばれる。徳山藩の藩儒。昭陽の父南冥と親交があり、そのことから昭陽が徳山を訪れた際に師事することとなる。

徳城 徳山藩の城下を指す。

故舊雲集餞予兮 ここの「2-2-2」の破調である。昭陽が以前徳山を訪れた時に親交のあった旧友が今また大勢集まってくれて歓迎されている様を強調するのだから。

行色壯氣成虹兮 後述のように盧照鄰に「氣成虹」の三字句があり、「3-3」で切って「行色壯んにして氣虹を成し」とも読めるが、前後四句に句中の助字が全くないことから、四句セットの破調で、二句前と同じく「2-2-2」であると解した。

壯氣成虹 盧照鄰の「西使兼送孟學士南遊（西使し兼ねて孟學士の南遊するを送る）」詩に、「唯餘劍鋒在 耿耿氣成虹（唯餘す劍鋒在りて 耿耿として氣虹を成す）」とある。伝統的には虹は不祥の兆しであるが、盧照鄰ではさかんな気持ちが虹をなさしめた、とあるので、昭陽のこの部分と通じる。

小瀬 山陽道で周防から安芸に入る国境の川。渡し場があった。

六八 広島県廿日市市大野に「四十八坂」あり。

盤垣 うねうねと曲がった坂。

巖島 小瀬を越えて山道を抜けると巖島（宮島）の正面に出る。

巖然 高大堅固なさま。

巖島巖然于滄瀛 字余りにより、巖島の雄大さを強調している。

[通釈]

秋月藩主黒田長舒公の恩寵のおかげで
私はこれからはるか遠くの東方に出遊しようとしている
世俗のしびりが急にほどけたのは喜ばしい
跡継ぎの長男の将来の吉兆だろうと思うと楽しみだ
父は手を叩きながら舞を舞って私を励まし
母は喜んで私の旅支度をしてくれる

時は丙寅の年十月一日
 甲の日の朝に私は出立した
 私は意気揚々と馬に鞭をくれ
 故郷の山に挨拶をして国境を出た
 小倉を過ぎて船に乗り
 関門海峡の波を越えてこぎ渡った
 長門を過ぎるとついに周防の国に入り
 我が師匠に徳山城下でお目にかかった
 昔の学友達がたくさん集まって私の旅路を祝ってくれ
 古式ゆかしい琴の演奏を披露してくれた
 旅立ちの強い気持ちが前途に虹を架け
 小瀬の渡しを舟で渡って安芸の国の南部に入った
 四十八坂のつづら折りを越えると
 巖島が青海原に高々とそびえ立っている

第二段 (021~034)

廻廣陵之城樓兮		廣陵の城樓を廻り
蹠三備之陸續	入聲 3 燭	三備の陸續たるを蹠 (ふ) む
薇公邈不可追兮		薇公は邈 (はる) かにして追ふべからざるも
欽芳烈之舊俗	入聲 3 燭	芳烈の舊俗を欽 (つつ) しむ
盛平田之校獵兮		平田の校獵を盛んにし
美君子之儒學	入聲 4 覺	君子の儒學を美 (よみ) す
歌甘棠于上道兮		甘棠を上道に歌ひ
奏幽風于伊福	入聲 1 屋	幽風を伊福に奏す
心滄躍其如沐兮		心は滄躍 (せんやく) して其れ沐するが如く
覺肺肝之化玉	入聲 3 燭	肺肝の玉と化するを覺ゆ
遵姫路而覽古兮		姫路に遵ひて古へを覽 (み)
有感先公之芳躅	入聲 3 燭	先公の芳躅に感ずる有り
遊明石與高砂兮		明石と高砂に遊び
山水窈窕于人目	入聲 1 屋	山水人目に窈窕たり

[語注]

廣陵 安芸国都広島の雅名。長江下流域の古都の名に取る。

三備 安芸の次は順に備後・備中・備前の吉備三国である。

陸續 「陸」は屋韻、「續」は燭韻で豊韻の擬態語。

薇公 「吉備」を「黄薇」とする表記法がある。(岡山県地方史資料叢書に収める『黄薇古簡集』等。「紫微」のもじりか?) そのことから推せば、「薇公」は吉備の藩主を指すのであろう。後述の池田光政のこと。

芳烈 岡山藩主池田光政の諡号。池田光政は陽明学者熊沢蕃山を招聘して閑谷学校を開く。徳川光圀・保科正之と共に、江戸初期の三名君と称せらる。

平田 窪屋郡の村名。今の倉敷市内。

校獵 司馬相如「上林賦」に「於是乎背秋涉冬 天子校獵（是に於てや秋を背に冬に涉り 天子校獵す）」とある。

甘棠 詩経召南の篇名。召伯の仁政を思慕する内容から、過去の名君を偲ぶ時に使われる。

上道 備前国の郡名。今の岡山市内。

幽風 詩経国風の一つ。農事詩を取めることから、農本の象徴に使われる。

伊福 谷口澄夫『池田光政』（吉川弘文館 1961）によると、光政が鷹狩の帰途、御野郡伊福村で踏み倒してしまった稲穂を紙で補修した故事があるとのこと。或いはこれを指すか。

淪躍 おどろくこと。

如沐 春秋左氏伝僖公二十四年に「沐則心覆，心覆則圖反。（沐すれば則ち心覆り、心覆れば則ち反を圖る。）」とある。ここでは「反」は無関係だろうが、体が逆さまになることによって動悸がすることを言うものと思われる。

先公 昭陽の仕官する福岡藩、及び一行の主人秋月藩の祖先である黒田孝高を指す。孝高は小寺家の家臣として播磨国姫路に生誕。

芳躅 先賢の足跡。

有感先公之芳躅 一字多い。字数を優先するなら「有」を削ればよい。敢えて「有」字を使って字余りにすることで、福岡藩の藩祖に対する敬意を表わしているのだろう。

山水窈窕于人目 一字多い。「窈窕」を一字の語にすることも可能だったはずだが、敢えて二字の語を使って字余りにすることで、景色の美しさを強調したものと思われる。

[通釈]

広島之城下をめぐると

吉備三国が次々と現われる

岡山藩主池田光政公ははるか昔の人で追いかけることはできないが

公の遺した習俗は謹んで承ることができる

平田村での鷹狩りを盛んにし

閑谷学校の学びは素晴らしいものがある

甘棠を上道で歌って公の面影を偲び

幽風を伊福で奏でて農事を奨励する

公の遺徳に接すると心臓がどきどきして湯浴みするかのようなようであり

体の中から徳化されて心が洗われるのを感じる

姫路では古蹟を巡り

藩祖先黒田孝高公の足跡に感慨にふける

明石と高砂に行くと

風景が目美しく広がっている

第三段 (035~040)

須摩浦平郎碣兮		須摩の浦平郎の碣
村雨松風互引車	下平9麻	村雨松風互ひに車を引く
雲隱隱以駕龍兮		雲隱隱として以て龍を駕し
靈洋洋其如花	下平9麻	靈洋洋として其れ花の如し
拜楠將于湊川兮		楠將を湊川に拜し
涂尼崎入難波	下平8戈	尼崎を涂(わた)りて難波に入る

[語注]

須摩浦 一ノ谷の古戦場に位置する。敦盛塚あり。

須摩浦平郎碣兮 四文字目が助字ではない。「平郎碣」の語を優先したか。

村雨松風 能に出る姉妹の名。在原業平とのゆかりがあり、能「松風」の中では霊として現れて往事を語るうちに狂気して舞う。

村雨松風互引車 一字多い。「村雨」「松風」両名を出す必要性から。

湊川 須磨の東を流れる川。足利尊氏が楠木正成を討って自害させた。

[通釈]

須磨の浦には平敦盛の石碑があり
 村雨と松風の霊が互いに車を引っ張る
 雲はもくもくとわいて雨を降らす龍を禦し
 村雨と松風の霊はあたりにみちみちて美しい花のようである
 湊川神社で楠木正成に参拝し
 尼崎を渡って大阪に入った

第四段 (041~046)

亶聖帝之古墟兮		亶(まこと)に聖帝の古墟にして
控萬邦于海口	上聲45厚	萬邦を海口に控(おさ)ふ
横八百之長橋兮		八百の長橋を横たへ
簇四萃之鷓首	上聲44有	四萃の鷓首(げきしゅ)を簇(あつ)む
推列侯之租税兮		列侯の租税を推(もっぱ)らにし
窮貨殖之富有	上聲44有	貨殖の富有を窮む

[語注]

聖帝之古墟 注本に「仁徳皇居難波高津宮」とある。

八百之長橋 「江戸の八百八町」「京の八百八寺」「浪花の八百八橋」の併称あり。

鷓首 船首に鷓(水鳥の一種)を飾ったところから、船を指す。

[通釈]

ああ聖帝の古都よ
 万国を港に従わせている
 八百八橋を渡し
 群がる舟を集めている
 諸侯の年貢を我が物として
 蓄財すること極まりなし

第五段 (047~058)

従城壕而迴靶兮		城壕に従ひて靶（たづな）を廻らし
愕豊臣氏之爲豪	下平6豪	豊臣氏の豪爲るに愕（おどろ）く
棹淀川於明月兮		淀川に明月に棹さし
逮伏見於殘宵	下平4宵	伏見に殘宵に逮ぶ
招桃原之遁仙兮		桃原の遁仙を招き
求梅塢之花妖	下平4宵	梅塢の花妖を求む
拉高僧于深艸兮		高僧を深艸に拉（ひ）き
賽御香之神皇	下平6豪	御香の神皇を賽（まつ）る
敲黄檗與平等兮		黄檗と平等を敲き
浴菟道以翔翱	下平6豪	菟道に浴して以て翔翱す
慨英武之血戰兮		英武の血戰を慨すれば
宇川激波怒號	下平6豪	宇川の激波に怒號

[語注]

愕豊臣氏之爲豪 字余りであるが、徳川氏が滅ぼした豊臣氏の巨大さを強調することになる。当時として特に問題はないのだろうか。待考。

伏見 琵琶湖から大阪湾に注ぐ川に開かれた河川港。京都と大阪を船で結ぶ要衝。

招桃原之遁仙 注本に「用武陵溪故事」とある。武陵の人が訪れた桃源郷の故事か。注本に「桃山也」ともある。桃山は伏見の地名。実際の地名を元に桃源郷の故事を使ったものであろう。

求梅塢之花妖 注本に「用羅浮山故事」とある。ある人が羅浮（広東省）の梅花村に滞在し、夢で梅花の精に会ったという故事が柳宗元『龍城録』にある。梅塢については、注本に「梅山也」とある。しかし、伏見やその近辺に梅山もしくはそれに類する地名は見当たらない。注釈者は別に知見があった注したものか不明。

高僧 注本に「元政坊也」とある。江戸初期に深草に庵を結んだ元政を指す。

御香 御香宮神社を指す。伏見の産土神で神功皇后を祀る。

敲 推敲の故事で有名な賈島の「僧敲月下門」を意識して、寺を訪問するのにこの字を選んだと思われる。

黄檗 宇治にある黄檗宗本山の黄檗山萬福寺を指す。

平等 宇治にある平等院を指す。

宇川 平安末期、源義仲と源頼朝の間で争われた宇治川の戦いを指す。佐々木高綱と梶原景季の「宇治川の先陣争い」が有名である。

宇川激波怒号 「2-2-2」の破調である。宇治川の激流を目の当たりにして、「宇治川の先陣争い」は、かくも激しい川で行なわれたのかとの感慨を込めたものと思われる。

[通釈]

大阪城の堀に沿って馬を進めると
豊臣氏の権勢が大きかったのに驚く
淀川を月夜に舟で上り
伏見に明け方に到着する
桃山に桃源郷の仙人を招き
梅山に羅浮梅花村の梅花の精を探す
元政和尚を深草で偲び
御香宮神社でお参りをする
黄檗山萬福寺と平等院を訪ね
宇治神社で清められてその先をかけていく
英雄達の血みどろの戦いを思う
宇治川の激しい波に響く怒号